

6 読み聞かせについて考える

1 研究の動機

本校の子どもたちは、ちえやことばが遅れているのであって、全てが遅れているというわけではない。どんな障害をもった子どもたちも、素直で優しく明るい心をもっている。そんな心に、より豊かな心（おもしろい・かなしい・美しい・楽しい等が理解できる心）を、自分自身で身につけていくことを願って、研究をすすめていきたいと思ったのである。

ちえ遅れの子どもたちの中には、ことばのない、文字も読めない子どもたちが大勢いる。こんな重度障害をもった子どもの中には、絵本を読み聞かせると、ほとんど絵本に反応を示さない子どももいるが、絵本の絵に興味・関心を示したり、読んでもらう人からその本の楽しさを伝えられ、喜こんでいる子どもたちがいる。そんな子どもたちのために、私達のグループは、子どもたちの発達と障害に合った本を選ぶというだけでなく、本と子どもたちとの心を出合わせるための手だてが大切だと考えた。

また、ちえ遅れの子どもたちは生活経験が乏しく、絵本を読み聞かせても想像化することが困難な子どもが多い。しかし、絵本を通して間接的に生活経験や人間関係を豊かにしてやり、ちえやことば、知識や創造力を育てて心を豊かにしてやりたいと考えて実践していくことにした。

2 研究にあたって

(1) 昨年度の研究

昨年度は研究一年目であったため、試行錯誤で研究が進められてきた。

まず、読み聞かせを行うに当って共通理解を持った。それは、子どもたちすべて優しく素直な心を持っている。それを、絵本の読み聞かせを通して、より豊かな心に育てること。また、間接的に生活経験や人間関係を豊かにすることなどである。

次に、実践として大きく分けて二つある。

一つは、各担当クラスでカリキュラムの中に位置づけて読み聞かせを行ってきた。例えば、国語の授業、グループ学習、終りの会などで行うのである。もう一つの実践は、全校生徒を対象とした「絵本の日」である。

これらの実践を通して、それぞれのクラスの子ども達に合った本の選定や、より子ども達の興味を引きつけるような読み方などを、週二回行われるグループ研究会で討議してきた。そして、子どもの反応をより緻密に受けとめながら、読み聞かせの手だてを研究してきた。

(2) 今年度の研究

昨年度の研究の“まとめと今後の課題”をふりかえり、今年度の研究計画をたてた。

- ① 読み聞かせへの基本的な研究や心づかいを常に確認し合う

- ・ 絵本は楽しいものである。
- ・ 絵本の選び方については、個々の子どもの反応をみつめ、また、担当グループの感動表現等を細かに受けとめ、子ども達に合った絵本を取り上げる。そのためにも、研究員は1冊でも多くの絵本を読むようにする。
- ・ 読み聞かせは、継続して行う。
- ・ 読み手（先生）は、その絵本（作品）の良さを受けとめ、心をこめて読む。
- ・ 読み聞かせについては、声の大きさや強弱、間のとり方、ページのめくり方等を研究する。
- ・ 絵本の内容をくみとり、少しでも豊かな感動がもてるように、動作化・歌・絵本の中で見られる小道具・音響効果・ペープサート・劇化などもとり入れる。
- ・ 自閉的傾向の子どもへの本選びや読み聞かせ方を特に考慮する。
- ・ 環境の整備として、まず、図書充実を。各学部ごとの図書棚と絵本の配架や、各教室で子ども達が自由に絵本を手にとり、読むことのできる学級文庫とその書架を。

② 読み聞かせの実践

— 各クラスでの読み聞かせの実践 —

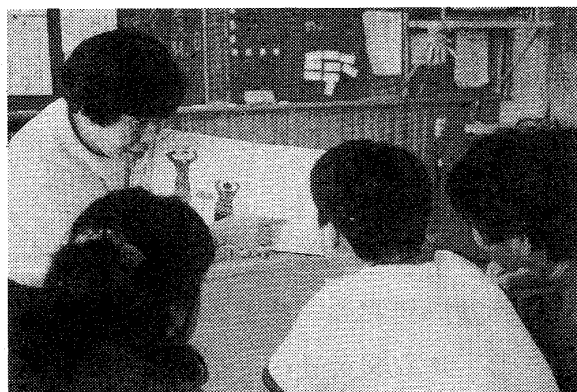
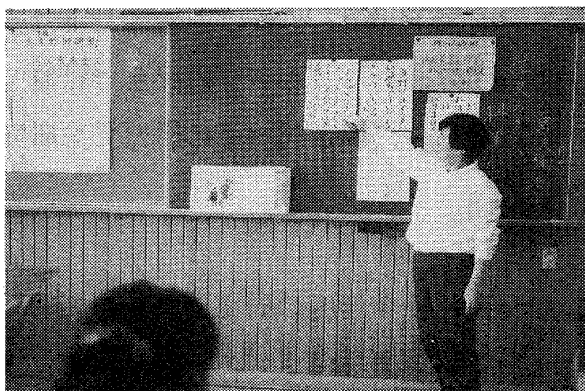
A教諭	小学部1組	水曜日の11時～11時45分	生活の時間
B教諭	小学部1組	水曜日の1時35分～1時50分	終りの会の時
	小学部2組	水曜日の1時35分～1時50分	終りの会の時
C教諭	中学部Cグループ	週2回（40分ずつ）	
D教諭	高等部	月・火・水曜日の3限～4限	グループ学習（80分ずつ）

— 校内「絵本の日」での実践 —

読み聞かせグループが、全校の子ども達に呼びかけて、本校の和室で、毎週水曜日の昼食後12時50分～13時05分の15分間を「絵本の日」として読み聞かせをしている。

③ 絵本のリストづくり

研究員が、担当しているクラスで読み聞かせた絵本と「絵本の日」で取り上げた絵本を一覧にした。1月以降に読み聞かせた絵本や、子ども達にこれから読み聞かせたい絵本などはここでは省略する。



3 実践例

(1) 各担当クラスでの読み聞かせの実践

① 小学部1組(1・2年)について

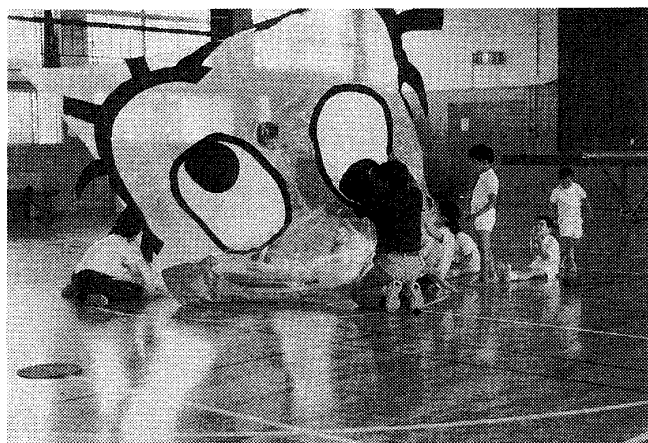
子どもの実態は、1年生3名、2年生4名の計7名で構成されている。障害別でみるとダウン症2名、自閉的傾向4名、コルネリア・デ・ランゲ症候群1名となっている。日常会話でみると、ほとんど問題がないのは1名、だいたい分かるのは1名、分りにくいのは2名、全く表出言語が無いのは3名となっている。また、子どもたちどうしでは、ケンカをするなどの関わり合いが一部でみられる程度である。

このようなクラスの中で、本に対する反応だが、読み聞かせに対して5名はだいたい興味を持っているように思われ、家庭でも母親に読んでもらったり、近くの家庭文庫で本を借りたりしている子もいる。しかし、残り2名は読んでいる最中に立ち歩くなど、あまり興味を示さない。

1学期は主に、『バーバーパパ』を中心に読み聞かせを行った。この本を選んだ理由は子どもたちの実態を考え、また、子どもたちの興味を見つめた時に、オバケが好きであること、そのオバケがいろいろな形に変身する楽しさが、子どもを引きつけると思い、選んだのである。このシリーズ6冊を何度か読み聞かせるうちに、好きな本がはっきりとしてきた。それは『バーバーパパのいえさがし』である。内容は、家を探しているバーバー一家に対し、地域開発と称して無政策にビルディングを建てる行政に対抗して、最後には、自分たちの好きな家を建てるという話である。特に、ロボットのようなブルドーザー、ショベルカーなどと戦うバーバー一家が、変身して力を合わせ、それらをやっつけるところが気に入ったようである。

その一方、バーバーパパのイメージをふくらますために、バーバーパパを作ろうということで自由に形を変えられるスライムを作り、それを利用したり、フィンガーペイントで描いたりした。中でも、6月の実習生による、バーバーパパと遊ぼうということで透明なゴミ袋を12枚近く貼り合せ、目鼻をつけ大きなバーバーパパを作り、その中に入ったりして楽しく遊んだのである。その後も何度か読み聞かせをし、今でも子どもたちのお気に入りの本となっている。

2学期になると、11月に行われる表現会に照準を合せ、絵本選びに入った。小学部の低学年の子どもたちが、感動をもち易いストーリーであることと、正義の味方が悪者(オニ)をやっつけるということで『ももの子たろう』を選んだ。その本を何度か読み聞かせるうち徐々に、



親しみを覚えてきたようである。そして表現会では『ももの子たろう』の一部を変え、子どもたちの表現に合うよう脚色した「桃太郎のまご“かきたろう”」という劇をした。その表現会后、もう一度『ももの子たろう』を読み聞かせると、子どもたちの表情が以前と違い強い視線を感じたくらいである。また読んでいる途中に台詞が出るくらい絵本に入り込めたのである。やはり、これは、絵本を劇化することによって、その中の登場人物になろうと努力した結果ではないかと思う。それだけ、『ももの子たろう』が身近に感じられるようになったのである。

こうして、1・2学期の読み聞かせを通して思うことは、まず絵本を選ぶ時の観点の大切さである。これには2つあり、まず1つ目は子どもたちが理解しやすい内容であること、これは『ももの子たろう』のような、正義の味方が悪者をやっつけるようなものであり、2つ目は子どもたちの興味、関心に視点を当てることである。これはバーバーパパに見られる、オバケの登場である。特に形の変えられるオバケに興味をもったようである。次に絵本の楽しさをより豊かにするために、スライムあそび・フィンガーペイント・ごっこあそびのように道具を使ってするもの、また表現会で演じるような劇化を用いていくものがあると思われる。

② 小学部1組(1・2年)・2組(3・4年)

4月の初めに、1組と2組の担任より「1組と2組で 子どもが下校の仕度を終えてから下校の挨拶をするまでの間 毎週木曜日と水曜日に、読み聞かせをやっていただけませんか」という話があった。

1組のクラスは、自閉的傾向4名・ダウン症2名・その他1名の児童が在籍している。この子たちの読み聞かせに対する反応は、絵本をすらすら読む子が1名と、部分的に「おもしろい」等の感想が言える子が1名いる。また、印象に残ったところで声をあげたり手をたたいたりする子が3名と、絵本にあまり反応を示さない子が2名いる。

1学期は、昨年度の後半に子どもたちが大変喜んだ、しかけ絵本の『コロちゃん』シリーズの絵本を読み聞かせた。このシリーズ本は、しかけ本のせいか大変興味を示し、読み終わった後も「おもしろかった」と言ったり、印象に残ったページを再度開かせたりした。また、この本が気に入った子どももあり、休み時間などに何度も何度も見て楽しんでいたようである。

2学期には、同じくしかけ本の『あかちゃんのおそびえほん』シリーズの絵本を読み聞かせた。この本は、絵が鮮明で話の内容も簡単であり、軽やかでリズムカルなことばで書いてあるためか、子どもたちは大変喜んでいて。また、2学期の後半になってから、『こぐまちゃん』シリーズの絵本を読み聞かせることにした。この本の内容はおもしろくてわかりやすかったからか、指で絵をおさえたり手をたたいて喜んでいて。しかし、シリーズ本の中で食べ物・生き物・乗り物等の生活体験のある本は興味を示したが、それら以外の本

には興味を示さない本もあった。

2組のクラスは、自閉的傾向5名・ダウン症2名・その他1名の児童が在籍している。この子たちの読み聞かせに対する反応は、部分的に「おもしろい」等の感想を言える子が2名と、印象に残ったところで声をあげたり手をたたいたりする子が1名いる。また、絵本の中でくり返しのあることばや生活体験のある絵に反応を示す子が1名と、乗り物・生き物・食べ物の絵や食べるまねだけに反応を示す子が3名、絵本にはほとんど無反応な子が1名いる。

1学期に見せた本は、1組に在籍していた子が2組に入って来ておるので、1組と同じ内容のしかけ絵本『コロちゃん』シリーズの絵本を読み聞かせた。このシリーズの本は、しかけ本のせいと、昨年から何度も聞いているせいか反応を示す子どもたちがいた。その反応の様子をみると、絵本の中のくり返しのあることばに反応する子ども、食べ物の絵や食べるまねに反応を示す子どもがみられた。中には、本の内容を覚えてしまって、ページをめくるたびに内容を話できる子もいた。

2学期になってからは、しかけ絵本も1組と同じく『あかちゃんのおそびえほん』シリーズの本を読み聞かせた。この本は、簡単なことばで書いてあるので、リズムカルで繰り返しや擬音のことばに口まねをしていた。特に、ダウン症の子どもの中には、教師が読み聞かせを行なう前に教師の椅子に座わり、絵本を読んで聞かせる子や、読んでもらった絵本を家に持って帰る子どもも出てきた。しかし、学校や小学部の行事で読み聞かせを継続して出来ないからか、時々無反応を示すこともあった。また、2学期の後半も1組と同じく『こぐまちゃん』シリーズの絵本を読み聞かせることにした。この本は1組で食べ物・生き物・乗り物等の生活体験のある本に興味を示したのであるが、このクラスの子どもたちは、ダウン症の子どもたち以外はあまり反応を示さなかった。

今年度は、自閉的傾向児がクラスに半分以上在籍していることや、昨年度の経験をもとにして、絵本の選びかたに注意し読み聞かせを行なった。まず、子どもたちの興味や関心のある絵本としてしかけ本を選びだし、しかけ本の中でも内容が簡単で生活体験のあるような本や軽やかな繰り返しのことばが書いてある絵本を選ばせるように留意した。また、読み聞かせ方も本数を沢山読み聞かせるのではなく、絵本の楽しさを知ってもらうため、1冊の本を何度も何度も繰り返して読み聞かせた。

③ 中学部Cグループ

・ Cグループの子どもたち

このグループの生徒は6名で全員、日常会話は支障なくできる。しかし、彼らの話しことばと書きことばは一致せず、ひらがなや単語がどうにか書けたり書けなかったりである。また、彼らの学校生活の様子をみると、自分勝手な行動が目立ったり、学校ではほとんどしゃべらない等の問題点があげられる。

- ・ 1学期の実践より

子どもたちの実態より、グループ学習では「読み書き」に重点をおかず、集団の中で子どもたち一人ひとりの感性をゆさぶり、ことばを育てる授業が必要だともう一人の担当者と話し合った。

そこで、授業の前半を「ことばあそび」、後半を「読み聞かせ」とし、4・5月に11冊の本を読み聞かせたところ、子どもたちも徐々に聞く態度が育ち「今日は何の本？」と楽しみにするようになってきた。

しかし、1冊の本を1回だけ読むという方法では子どもたちが何をどれくらい感じているのかわからない。たとえ何回も同じ本を読んだとしても、集中力、持続力に乏しい子どもたちが本をゆっくり味わうことはとても難しい。私たちが日常生活の中で強く意識しなくてもとらえている様々なことを見過ごしてしまうことが多いこの子たちに本の世界をどれくらい伝えられるのだろうと不安があった。

『めっきらもっきらどおんどん』

もっと違う読みきかせがあってもいいのではと考え始めたときこの本に出会った。ちょっぴりこわくて子どもたちの好奇心をくすぐるこの本だが、おばけたちと遊ぶ場面になると絵とことばを手がかりにイメージをふくらませることができず、十分に楽しめないようであった。ちょうど教育実習が始まる時だったので、教生と話し合い5時間かけて展開することにした。

まず、本の中にでてくる「ちんぷく～」の詩をことばあそびとしてかけあいで歌い、教生がおばけになって子どもたちと一緒に遊んだ。すると、いつもは指示されないと動かないY君が自発的に動いたり、家で「ちんぷく～」と口ずさむ子どももでてきた。最後にことばあそびだけを取り入れて本を読み聞かせると、最初とは違ってみんなとても集中して見ることができた。この本は子どもたちにとって教生と一緒に勉強した本として深く心に残ったようである。

同じく教生授業で、ことばあそびを楽しむ本として『へそとりごろべえ』を2時間で取り上げた。教生が子どもたちのおへそを取る真似をし、その手をパッと開くとまるで魔法のようにおへそ（鈴）がのっている。いつもは注意散漫の子どもたちも絵本や教生の動きに注目することができた。

- ・ 2学期の実践より

『ぐりとぐらのかいすいよく』

夏、学校では毎日プール。この季節にちなんでこの本を選んだ。まず、主人公のぐりとぐらを作りたいと白いトレーナーを染めてぬいぐるみを作った。くつ下で作ったしましまの水着、帽子に小さな浮輪もしてでき上がり。海のイメージの曲、波の効果音、それに貝がらやびん、手紙等の小道具も用意して即席の人形劇を演じ、後半は絵本にもどって読み聞

かせた。子どもたちは初めての人形劇にとっても興味を示してくれた。しかし、この本から絶えず聞こえてくる波の音や潮のにおいなど、子どもたちはどれくらい海をイメージできるのだろうか。海をもっと感じてほしい、そして子どもたち自身、見るだけでなく参加できるものと考え、波の音作りに挑戦することにした。

やなぎごおりのふたに小豆を入れたもの、マリン缶（アルミ缶を2つ合わせたもの）などさまざまなものを用意して十分遊んだあとは、絵楽符にしたがって全員で音作り。作った音は録音し、BGMとして流しながら本を読み聞かせると、みんなで作った波の音で、6人の心がやさしくひとつにまとまったかのように本の世界へと入っていった。

『つきよ』

夏が過ぎ、お月見の季節となりこの本を選んだ。1回目の読み聞かせではBGMも入れて絵をゆっくり見せるようにした。その後2～3回読み聞かせを重ねたが興味が持続せず、よそ見したり、おしゃべりしたりという状態であった。何とかもっと子どもたちをゆさぶれないかと考え、月のイメージにあった効果音を作ることにした。

波の音作りでも活躍したマリン缶やびんツリーなどで遊んだあと、読み聞かせと音を合わせてみた。私が本を読みながら音を出してみせると次の場面ではどの音かとみんなの瞳が輝きだした。今まで自分たちが遊んでいた音が本の世界と一致していく、その不思議さ楽しさをしっかりと感じとったようだ。自分たちも本に合わせて音をだしたりするうちに場面と音が一致していったり、「ブクブク」「バッシューン」等の擬態語も子どもの口からでてくるようになった。最後にはブラックライトを使っのてのパネルシアターを楽しんだ。

『ぐりとぐらのおきゃくさま』

クリスマスが近づき、ぐりとぐらも冬服に着替えて再度登場となった。今回は以前に小学部の先生が作った布製のくるくるシアターをかりてハッピータイム（中学部の学部集会）で演ずることに。背景が動くおもしろさ、そこから飛び出してくる長靴など、BGMとともに大勢の子どもたちを引きつけた。その後、本を読み聞かせるとよく聞き入っていた。

・ さいごに

この実践では、いろいろなアプローチを通して子どもたち個々の感性をゆさぶり、子どもたちと共感しあえる楽しさをもてた。しかし、本の選び方、展開等、非常に難しく、教師自身の絵本を読みとる力や感性が問われるのだと思う。

④ 高等部 グループ学習について

・ 高等部で“読み聞かせの授業”をするにあたって

今から9年前に、本校の副校長から次のような依頼があった。

「養護学校（本校）の高等部では、実社会に出る前の教育ということで、各教科を通してまた、実習を通して、生活に実用化されるような面の指導に重点をおいてきた。しかし、それだけではいけないのだと思う。子ども達は、どの子も、優しい心、美しい心、まじめ

な心、素直な心をもっている。その心をもっと育ててやることや、その子なりに考えていることを素直に育ててやる必要があるのではないだろうかと思う。

そこで、これらの面を育てる手だてとして、絵本や物語を読んで聞かせるということがあると思う。学校としては、国語（言語）の分野として位置づけられるが、文字の読み書きは教えてもらわなくてよいから、とにかく“読み聞かせの授業”をしてほしい」と。

このようなことから、非常勤講師として、生徒たちの反応をみつめ、研究実践を重ねてきた。しかし、なんといっても、生徒たちと共に楽しみながら“読み聞かせの授業”をし生徒たちの感動表現やつぶやき、感想に励まされているのである。

- ・ 生徒の実態と本（絵本）を選ぶ目あて

Hグループ（10名） — この生徒たちは、絵本を見入ることが出来、内容も大体理解できる。登場人物（動物なども含めて）の行動や、ことばを通して物語の意図がくみとれる。

そのため、少し長い物語も取り上げている。民話絵本（むかし話、伝説、語り伝えられているもの）を主とし、創作絵本（主人公が生徒の年齢に近いもの……知能的にやや障害はあっても、思春期としての精神面や情緒面は成長しているからである）も取り入れている。自閉的傾向で、やや理解の浅い生徒には、ことばかけ等を配慮している。

Mグループ（8名） — この生徒たちは、自閉的傾向のA君以外は絵本に見入り、楽しく話を聞こうとする姿勢である。主人公（動物なども含めて）の行動や心情もよく受けとめることができる。やはり民話絵本が多くなり、今年はHグループと同じ本を読み聞かせている。しかし、このグループでは、読み方や板書やことばかけには理解しやすいように考慮している。なお、リズムカルなことばや面白さをもったことばを楽しむ生徒たちである。

L₁グループ（8名） L₂グループ（7名） — この生徒たちは、知恵おくれ、自閉的傾向があり、ことばが出ないというやや重度の障害をもった生徒もいる。授業では、絵本を見る力も話を聞き入れる力もあまり無いという生徒たちである。そのため、絵が鮮明で、話の内容も簡単で、ことばのリズムカルなものを取り上げることにしている。ことばがリズムカルでくり返しのある部分では、生徒にも言わせ、その絵本の中に同化させるような手だてをとることがある。ことばの無い生徒でも介助の先生の指導で、その子なりの力で音声を出している。取り上げる本は、幼児向けの絵本が多くなるが、その絵本の意図する心情が、生徒たちに少しでも受けとめられるように配慮している。

- ・ 今年度、あらたに考慮した実践と研究の1例

— 読書の感動を高等部全員が互いに交流し合う“読み聞かせ読書紹介コーナー” —

今年度も、今までどおり、高等部全員を学習指導上編成されたグループ別で、生徒の実態に応じた本の読み聞かせの授業を行なっている。

ところが、4月半ば頃にHグループやMグループの2、3人の生徒から「他のグループでどんな本、読んでいるの」という問いがでてきた。そして、他のグループの友達に尋ねて

いる場も見た。本には年齢がないのだ。その子に合った感動の受けとめができるのだ、ということ、あらためて思い知らされた。そして、読み聞かせをした本を生徒全員に知らせるための“読書紹介コーナー”を設けることにした。これをきっかけに、各クラス担任の先生にも知っていただくことも大切なことだと思った。

読書コーナー（読み合った本）と表示し、色ケント（模造紙4分の1）を用意し、教室後方の掲示板に貼付する。各グループで読み聞かせた本の表紙を縮小コピーをし、色ケント台紙に貼付していく。

読書コーナーを見ての生徒の反応の1場面

- Mグループ高1男「“三ねんねたろう”はおもしろかったなあ。〇〇も読んだか」
- Hグループ高3男「うん、ぼくらも知っとるよ」
- Mグループ高1男「“じさとばさとおっさま”ってなんや、おもしろい題やな」
- Hグループ高1女「これ、おもしろいよ。ほんとに。私ね、1日だけこの本を借りていて家で読んだのよ」
- Mグループ高1男「へえ、ぼくらはよ、読んでほしいなあ」
- Hグループ高3女「“おおきなかぶ”これ、知っとるわ。私ね、小学校の時、劇したものの。私ね、おばあさんになったがや」
- Hグループ高3男「先生、それ、読んで」
- Mグループ高1男「ぼく、その本、知らん。読んで、読んで」

Hグループの生徒たちの『おおきなかぶ』についての話を聞いてびっくりした。この本は内容が単純だし、Hグループの生徒に授業としては簡単すぎると思っていたからである。だが、この本を知らない生徒もいたり、小学校の時に読んでもらったことへの楽しさの再現もあって、翌週にはこの本を取り上げた。今まであまり本への意欲を示さなかった自閉的傾向のY君もM君も最後まで絵本に見入っていたり、とても楽しい授業であった。教師としては、Hグループの生徒ということもあって、発問も考慮し、（ふしぎだなあ、どうしてだろうというような）考え合う場も配慮していった。

— 楽しみを共感し合えるようになった『はらぺこあおむし』 —

L1 8名、L2 7名の15名のグループ（介助の先生2名）である。このグループの中の3、4人は、読み聞かせた絵本について楽しく感動表現をする。しかし、その他の生徒については、少しでも絵本への興味関心をもってくれるように、本選びにも読み方にも気を付けている。

そこで、2学期になり、次のような授業をも考えてみた。生徒たちが絵本を少しでも楽しむことができるのは、その絵本の中の何かがわかった時ではなからうか。そのためには同じ絵本を1年の間にくり返して読み聞かせてみてはどうだろうか。そこで、再度取り上げたのがこの『はらぺこあおむし』である。卵から青虫になり、はらぺこという思いを

通して毎日何か食べものを食べる。この食べものへの興味と1週間という曜日の意識を重ねて楽しむことができると思ったからである。(絵本の内容は省略)

第1回－4月25日 第2回－6月26日 第3回－11月21日

第3回目の授業の時も15名全員に、意志表示のできるような問いかけをしながら読み聞かせをした。例えば、「月曜日の次は何曜日ですか」「木曜日には何を食べましたか」

「いちごの好きな人は手を上げて」等と。ところが、この日、このグループで今までみられなかった生徒の反応があった。それは、日頃、殆んど発言をしない生徒が思ったことを話したり、板書の文字を読んだりしたことだった。問いかける前から「ハイ、次は金曜日です」と言うN君。「いちご、おいしい、僕大好き」と笑顔ではっきりと言ったT君。3年生になった今まで自分から発言したことのないY君が「次、土曜日でたくさん食べます」と。また、読み聞かせている絵本に対して無表情なK君が板書を見て「り・ん・ご。すももも」と、自分から読んでいた。これらの生徒の反応を考えると、生徒たちは、くり返して読み聞かせたこの絵本についてはすでに内容も大体わかっており面白さも感じていたのだ。それが3回目ということで絵本の内容が更にわかり、みんなで絵本の楽しさが共感でき、自ら発言できる心の広がりをもつことができたからであると思う。

以上の2例しか記すことができなかったが、今年の実践をふりかえってみると次の3点を思う。まず、第1は、読書紹介コーナーを設けたことにより高等部の生徒たちが読み聞かせた本についての内容や面白さを交流し合えたことだ。今後も続けていきたい。次に思うのは、やはりL₁、L₂グループの生徒たちの感動をゆさぶるような絵本の出会わせと、自閉的傾向の生徒への読み聞かせの考慮である。この自閉的傾向の生徒たちに絵本での感動をもたせるには、教師はその生徒たちの生活経験や興味関心をもった事物について知って本を選んだり、また、一対一での読み聞かせも必要であると思う。長い日時をかけて研究実践していきたい。最後に思うのは、何といても教師が一冊でも多くの絵本を手にとり絵をよみとり、ことばを読みとり、良い絵本を選ぶことだ。そして、生徒たちに一冊でも多くの本を読み聞かせていくことの大切さを、また、強く思うのである。

(2) 校内「絵本の日」での読み聞かせ

昨年度は初めての試みとして、全校の子どもたちに呼びかけて昼休みに研究部員が順番に読み聞かせる「絵本の日」が発足した。行事の合い間をぬって、昨年度は27回の「絵本の日」がもたれ、延べ454人の子どもたちが毎週水曜日の昼休みに和室に集まって他学部の子ともたちと肩を並べて絵本を楽しんだ。

私たちは昨年1年、この「絵本の日」を続ける中でこの日をとても楽しみにしてくれる子どもたちを大切に見守ってきた。また、私たち教師自身、週1回集まってお互いの読み聞かせを見合うことが大変勉強になった。

そこで、今年度も是非、この「絵本の日」を続け、さらに読み聞かせの輪を広げたいと

—「絵本の日」の実践の一例—

日付	書名	参加人数	配慮事項	子どもの反応	反省
5/13	すてきな三人組	11	<ul style="list-style-type: none"> ○この話はやや内容が難しいので、導入として子どもたちの興味をひくように「すてきな三人組というすてきな人は実はどろぼうなのです」と話し、こわそうだけどおもしろそうという雰囲気をもたせようとした。 ○ラッパ銃等の武器の面白さを強調した。 ○「みなし子を手を助けて育てるすてきな人でした」ということばでまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ラッパ銃等の武器を使うところが面白かった。 ○「わあー宝物がたくさんあるね」という声もあったが、「そのお金でかわいい子どもを手を助けてえらいね」とつぶやく子どももいた。(中2M子) 	<ul style="list-style-type: none"> ○小学部の子どもたちも、どろぼうや愉快な武器がでてきたためか、なんとなく楽しく聞いていたようだ。この絵本の良さであろう。 ○読み聞かせの途中で問いかけをすると、豊かな発言ができるようになった子が増えてきてうれしい。
6/6	ろくべえまってるよ	13	<ul style="list-style-type: none"> ○まず表紙の絵を見ながら、この本の内容をごく簡単に話し、本の題名を読むときは、犬のろくべえに「まってるよー」という思いをこめて話した。 ○深い穴に落ちたろくべえを少しでも早く助けなければ死んでしまうという思いをこめて読み聞かせた。 ○子どもの反応をみながら「みんなだったらどうやって助ける？」ときいてみた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○中、高等部の2、3人の子どもたちから「ろくべえかわいそう」「死んだらだめ」という声があり、あとの子もなんだかその思いになったようだ。 ○ろくべえの喜ぶ歌『どんぐりころころ』や『おもちゃのチャチャ』はとても楽しく、ほとんどの子どもはいっしょに歌った。 	<ul style="list-style-type: none"> ○かたい雰囲気になりそうだったので、「みんなならどうやって助けますか？」という質問に対する答をあまり求めなかった。 ○「ろくべえが助けられてよかったね」という思いをこめたことばで終ったのはよかった。
6/13	かえる	12	<ul style="list-style-type: none"> ○あらかじめ「ケロケロなくのはオスカメスカ」などの質問を紙に書いて提示し、かえるに対する興味を持たせて読んだ。 ○絵本のかえるを触らせてみた。 ○質問の答になりそうなところは強調して読んだ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○比較的能力の高い生徒は質問に答えようと内容に注目していた。 ○絵本のかえるに触れるとき、おそろおそろ手をのばしてさわっていた子もいた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○少し理屈っぽくなると退屈してしまう子どもがいた。 ○本物のかえるを見せればさらに楽しかったと思う。
6/20	もしもしおかあさん	11	<ul style="list-style-type: none"> ○絵本をもつ位置を読み手の胸の前において表情豊かに語りかけた。 ○最後には腰をおろしてゆっくりとおわり余韻をもたせた。 ○ページのめくり方に変化をもたせた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ねこのお母さんが悲しそうに鳴くと心配そうにのぞきこむ子どもがいた。 ○ねこという身近な動物に興味をもって話に聞き入る子どもが多かった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○話し手の声がこの作品によく合っていた。 ○読み手の表情と作品の心情が一致していた。
10/17	うみとぼく	13	<ul style="list-style-type: none"> ○「母なる海」がテーマになっている本なので、海のイメージを伝えるために波の音をBGMに流した。 ○ストーリーよりも絵に迫力がある本で、本のイメージにあった曲を流しながら絵をゆっくりと見せた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○荒々しい暗い海に自分たちの知っている夏の海との違いを感じたようだ。 ○夕陽が沈む場面では「わあーきれい」という声があがった。 ○高等部の生徒の中には「彼と海で歩きたい」とロマンティックな気分ひたる女生徒もいた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○小学部の子には少々難しい作品だった。 ○いつもと違う雰囲気の本にBGMが入ったが、子どもたちにはあまり抵抗がないようだった。
11/7	じごくのそうべえ	9	<ul style="list-style-type: none"> ○表現会が近かったので、高等部の生徒が中学部の時の表現会で演じた本を選んだ。 ○読み終ってから劇を思い出し、間近にせまっている表現会を上手にやる気持ちをもたせた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○一部の生徒は以前の表現会で演じているので興味津々で見ている。 ○「うんち」ということばに喜ぶ生徒がいた。 ○読み終った後も以前の表現会の話でもりあがった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○話の内容を知っている生徒も知らない生徒も迫力ある絵に見入っていた。

話し合い、4月より昨年度と同じ水曜日の昼休みに「絵本の日」をすることになった。

絵本の日 の一日

登校時	看板 ・ 玄関 ・ 小ホール
↓	
12:45	校内放送
↓	
12:50	手あそび・読み聞かせ
↓	
13:05	読書カード配布



「今日は絵本の日です」という今井教官の放送の声も今ではすっかりおなじみで、子どもたちは「今日は何先生が読んでくれるのかな」と楽しみに集まってくる。小2組の中度の知恵遅れでちょっとしたことに怒りだすU児は、今年度より担任の声かけで毎週参加しており、和室に入るとさっと自分の定位置に坐り、ニコニコ笑って読み聞かせを聞いている。あれこれと指示されることもなくゆったりとした雰囲気この会は、U児にとって心地よいものであるらしく、いつも表情は穏やかである。

昨年度に比べると読書カードがほしくて来る子どもはほとんどおらず、集まる人数も小じんまりとしてきた。最近あまり来なくなった子どもに理由を聞くと「おもしろくないもん」と答える子がいる。年齢も障害も能力も違う子ども達に対してどんな本を選ぶかということや、どの子も楽しめる読み方の工夫など課題は多い。一回毎の読み聞かせを大切にしながら、今後とも研究する必要があると思われる。

また、U児のように自発的には来れなくても担任の声かけで来れる子もいる。絵本の楽しさを全校に、そして親にまで広めていくためにも他の先生方の協力は必要であり、担任との連絡をとりながら「絵本の日」を今後も続けていきたい。

4 まとめと今後の課題

絵本の読み聞かせは、多くの養護学校で、いろいろな時間にちょっとした場所で開催されているのではないだろうか。しかし、読み聞かせについて仲間同志で話し合いをしたり、グループで研究をしている学校は、案外少ないのではないかと思う。本校でも他校と同じように、話し合いの必要を認めながらも、なかなか取り上げられなかった。しかし、昨年度初めてグループを作って研究してみることにした。

昨年度の研究の歩みを簡単に振り返ってみると、まず、子どもたちが持っている優しく素直な心を、より豊かにすることを願って研究を進めた。そして、絵本の選び方や読み聞

かせ方等を考えたり、絵本の表示方法や親への呼びかけを考えて実践した。

今年度の研究の経過をまとめてみると、一つには、子どもたちに絵本の楽しみを知ってもらうために、読み聞かせの方法を考えることである。まず、子どもたちに多くの本と出会わせることを考えた。これは、子どもたちの求めている絵本や感動するものが何であるかを教師が知るためである。そのため、各学部で絵本を購入してもらった。また、昨年度は、絵本を選ぶ時に、子どもやグループの実態・能力差を考え、教師自身が好きな本や良いと思う本を選んできた。しかし、今年度は、多くの絵本の中から、教師が絵や文をみて数冊を選び、その数冊の絵本の中から子どもたちが自分たちの興味や関心のある本を選ばせる試みもなされた。そして、子どもたちの実態によっては、絵本の楽しさを知ってもらうため、繰り返しくりかえし読み聞かせることもあった。さらに、絵本の読み聞かせを行なう時は、昨年度よく話し合われたのであるが、読み聞かせの時の雰囲気作り（歌や手遊び・ペープサート等の具体物・自由な発表）や、読み聞かせをする時の技術（声の大きさや強弱・間の取り方・本のめくり方）も大切なことである。また、今年度各教師が気を配ったことでは、絵本のイメージを膨らませる（ことば遊び・音作り・パネルシアターやスライム、人形等の小道具の使用・ごっこ遊びや劇化・動作化）こと、読み手の手助けをする介助の仕方も大切な要素である。

二つには、子どもたち自らが絵本を読みやすいように、校内の環境を整備することが大切である。これは、昨年度から度々気を配ったことであるが、絵本の設置場所（いつでも自由に取り出せる場所）、絵本の置く高さ（子どもの目の高さを考慮）、絵本の提示方法（表紙全体の提示・推薦本の提示・分類提示）等も大切なことである。

三つには、絵本の読み聞かせが、障害児の発達にとって大切であることを、多くの大人達に知ってもらうために、読み聞かせを啓蒙することが大切である。まず、校内の先生方に理解してもらう必要があると思う。昨年度より行なわれている、「絵本の日」の読み聞かせは、子どもたちに、より多くの本と出会わせ、本の楽しさを知らせるために行なっているだけでなく、先生方への読み聞かせの啓蒙でもある。そのためか、この「絵本の日」の主旨を理解し、協力してくださる先生方も出てきている。学級の終りの会等いろいろな時間をつかって読み聞かせを実施し、子どもたちが絵本に親しむようにしている先生方もみられる。また、家庭でも、父母に絵本の読み聞かせの大切さを呼びかけ、実施してもらうことが大切である。今年度になって、学校で読み聞かせた絵本名と内容の概略・生徒の反応を書いた「お知らせ」を、家庭に渡している先生がいるが、これなどは父母に大いに影響を与えらると思う。さらに、学校と家庭の連携も必要なことであり大切なことである。連携がないと、学校と家庭の読み聞かせの方針がちがったりして、絵本に対してアレルギーをもつかもしれないからである。

以上のように、読み聞かせの方法・校内の環境の整備・読み聞かせの啓蒙の三つについ

てまとめてみたが、読み聞かせの方法や校内の環境の整備については、昨年度・今年度とかなりグループ間で話し合われてきた。しかし、まだまだ研究の余地があるのではないかなと思う。特に読み聞かせの啓蒙については、今後研究の課題が多くあるように思われる。

本校で読み聞かせた絵本リスト

『絵本の日』で 読み聞かせた絵本

(12月現在)

書 名	作	絵	出 版 社
おしゃれな おたまじゃくし	塩 田 守 男	さくら ともこ	PHP 研究所
ひょうとくさま	岩 崎 京 子	石 倉 欣 二	ほるぷ出版
おじさんのかさ	さ の ようこ	さ の ようこ	銀 河 社
すてきな三人組	トミー・アンケラー いまえよしとも訳		偕 成 社
ろくべえ まってろよ	灰 谷 健次郎	長 新 太	文 研 出版
かえる	上 野 俊 一	坂 口 武 之	フレーベル館
もしもし おかあさん	久 保 喬	いもと ようこ	金 の 星 社
えすがたよめさま	木 島 泉	石 倉 欣 二	ほるぷ出版
こぶた四ひき ちんちろりん	か こ さとし	か こ さとし	偕 成 社
おばけのバーバパパ	アネット・チゾン やましたはるお訳		偕 成 社
ぐりとぐらの かいすいよく	中 川 李枝子	山 脇 百合子	福 音 館 書店
こんとあき	林 明 子	林 明 子	福 音 館 書店
チョロリンとトッケー	降 矢 な な		福 音 館 書店
とんぼの うんどうかい	か こ さとし	か こ さとし	偕 成 社
じごくのそうべえ	田 島 征 彦	田 島 征 彦	童 心 社
うみとぼく	中 渡 孝 治		福 武 書 店
子そだて ゆうれい	桜 井 信 夫	若 山 憲	
ももの子たろう	大 川 悦 生	箕 田 源二郎	ポ プ ラ 社
めっきら もっきら どおんどん	長谷川 攝 子	ふりや な な	福 音 館 書店
かもとりごんべえ	岩 崎 京 子	渡 辺 有 一	第 一 法 規

小学部 1 組で 読み聞かせた絵本

チョロリン すてきなセーター	降 矢 な な		福 音 館 書店
チョロリンとトッケー	降 矢 な な		福 音 館 書店
ももの子たろう	大 川 悦 生	箕 田 源二郎	ポ プ ラ 社
かえる	上 野 俊 一	坂 口 武 之	フレーベル 館
アンパンマン	やなせ たかし		フレーベル 館

おばけが ぞろぞろ	ささき ま き		福 音 館 書 店
11ぴきのねこ	馬 場 のぼる	馬 場 のぼる	こ ぐ ま 社
くろい とんかち	山 崎 英 介		福 音 館 書 店
ねずみとブランコ	なかえ よしを	上 野 紀 子	ポ プ ラ 社
バーバパパの がっこう	アンネット・チゾン やましたはるお(訳)	タラス・ティラー	講 談 社
バーバパパの いえさがし	"	"	"
バーバパパの はこぶね	"	"	"
バーバパパの 大サーカス	"	"	"
バーバパパ たびにでる	"	"	"
てぶくろ	内田莉莎子(訳)	エウゲーニ・M・ ラチョフ	福 音 館 書 店

小学部1・2組で 読み聞かせた絵本

コロちゃんは どこ？	エリック・ヒル		評 論 社
コロちゃんのおさんぽ	"		"
コロちゃんの たんじょうび	"		"
コロちゃんの クリスマス	"		"
コロちゃんの がっこう	"		"
ごあいさつ あそび(あかちゃんのおそびえほん1)	木 村 裕 一		偕 成 社
いないいないばあ あそび(" " 2)	"		"
いただきます あそび(" " 3)	"		"
こぐまちゃん おはよう	若 山 憲	若 山 憲	こ ぐ ま 社
こぐまちゃん ありがとう	"		
こぐまちゃん おやすみ	"	"	"
こぐまちゃんと ぼーる	"	"	"
こぐまちゃんと どうぶつえん	"	"	"
こぐまちゃんと ふうせん	"	"	"
こぐまちゃんの うんてんし	"	"	"
こぐまちゃんの みずあそび	"	"	"
こぐまちゃんの どろあそび	"	"	"
こぐまちゃんの いたいいたい	"	"	"
しろくまちゃんの ほっとけーき	"	"	"
しろくまちゃん ぱんかいに	"	"	

中学部Cグループで 読み聞かせた絵本

おおきなかぶ	内田莉莎子(再話)	佐藤 忠 良	福音館書店
みんな うんち	五味 太 郎	五味 太 郎	”
かえるのつなひき	儀間 比呂志	儀間 比呂志	”
だいくとおにろく	松井 直(再話)	赤羽 末 吉	”
はじめての おつかい	筒井 頼 子	林 明 子	”
だるまちゃんと てんぐちゃん	加古里子	加古里子	”
ほ ね	堀内 誠 一	堀内 誠 一	”
すっきり うんち	七尾 純	守矢 る り	あかね書房
きんぎょが にげた	五味 太 郎	五味 太 郎	福音館書店
じごくのそうべい	田島 征彦	田島 征彦	童心社
がまんが だ がまんが うんち	梅田 俊作	梅田 俊作	岩崎書店
めっきら もっきら どおんどん	長谷川 攝子	降矢 な な	福音館書店
へそとりごろべえ	赤羽 末 吉	赤羽 末 吉	童心社
ぐりとぐらの かいすいよく	中川 李枝子	山脇 百合子	福音館書店
つきよ	長 新 太	長 新 太	スピカ社
ぐりとぐらの おきゃくさま	中川 季枝子	山脇 百合子	福音館書店

高等部グループ学習で 読み聞かせた絵本

— Hグループ —

三ねん ねたろう	大川 悦 生	渡辺 三 郎	ポプラ社
しろいうさぎと くろいうさぎ	カーズ・ウィリアムズ 松岡 享子(訳)	カーズ・ウィリアムズ	福音館書店
ねずみと くじら	ウィリアム・スタイク せたていじ(訳)		評論社
しまふくろうのみずうみ	寺島 圭三郎	寺島 圭三郎	福武書店
鼻かけじぞうさん	かつお きんや	箕田 源二郎	講談社
かあさんのおめん	吉沢 和 夫	北島 新 平	ほるぷ出版
じさと ばさと おっさま	浅川 欽 一	石倉 欣 二	第一法規
半日村	斎藤 隆 介	滝平 二 郎	岩崎書店
おおきなかぶ	内田莉莎子(再話)	佐藤 忠 良	福音館書店
もしもし おかあさん	久保 喬	いもと ようこ	金の星社
おならをした かかさま	水谷 章 三	太田 大 八	ほるぷ出版
おじさんの かさ	さの ようこ	さの ようこ	銀河社
花さき山	斎藤 隆 介	滝平 二 郎	岩崎書店
たなばたさま	住井 す ゑ	滝平 二 郎	河出書房新社

スーホの白い馬	大塚 勇三(再話)	赤 羽 末 吉	福 音 館 書 店
うしかたと山んば	坪 田 譲 治	村 上 豊	ほるぶ出版
日本のお米	和久井 晶 代	梅 田 俊 作	PHP 研究所
やまなしもぎ	平野 直(再話)	太 田 大 八	福 音 館 書 店
注文の多い料理店	宮 沢 賢 治	池 田 浩 彰	講 談 社
鯉にょうぼう	松 谷 みよ子	西 山 三 郎	岩 崎 書 店
いいものもらった	森 山 京	村 上 勉	小 峰 書 店
かさこじぞう	岩 崎 京 子	あらい ごろう	ポ プ ラ 社

— Mグループ —

村いちばんのさくらの木	来 極 良 夫	斎 藤 博 之	岩 崎 書 店
三ねん ねたろう	大 川 悦 生	渡 辺 三 郎	ポ プ ラ 社
おしゃれな おたまじゃくし	塩 田 守 男	さくら ともこ	PHP 研究所
半日村	斎 藤 隆 介	滝 平 二 郎	岩 崎 書 店
しまふくろうの みずうみ	手 島 圭三郎	手 島 圭三郎	福 武 書 店
じさと ばさと おっさま	浅 川 欽 一	石 倉 欣 二	第 一 法 規
かもとり ごんべえ	岩 崎 京 子	渡 辺 有 一	第 一 法 規
スーホの白い馬	大 塚 勇 三	赤 羽 末 吉	福 音 館 書 店
日本のお米	和久井 晶 代	梅 田 俊 作	PHP 研究所
やまなしもぎ	平野 直(再話)	太 田 大 八	福 音 館 書 店
一つの花	今 井 祐 行	鈴 木 義 治	ポ プ ラ 社
注文の多い料理店	高 沢 賢 治	池 田 浩 彰	講 談 社
おじさんのかさ	さ の ようこ	さ の ようこ	銀 河 社
鯉にょうぼう	松 谷 みよ子	西 山 三 郎	岩 崎 書 店
いいものもらった	森 山 京	村 上 勉	小 峰 書 店
かさこじぞう	岩 崎 京 子	あらい ごろう	ポ プ ラ 社

— L₁ L₂ グループ —

しろいうさぎと くろいうさぎ	カーズ・ウィリアムズ 松岡 享子(訳)	カーズ・ウィリアムズ	福 音 館 書 店
はらぺこあおむし	エリック・カール もり ひさし(訳)	エリック・カール	偕 成 社
ぼくのうち どこ	なかえ よしを	上 野 紀 子	ポ プ ラ 社
おおきな かぶ	内田莉莎子(再話)	佐 藤 忠 良	福 音 館 書 店
しまふくろうの みずうみ	手 島 圭三郎	手 島 圭三郎	福 武 書 店
鼻かけじぞうさん	かつお きんや	箕 田 源二郎	講 談 社

もしもし おかあさん	久 保	いもと ようこ	金 の 星 社
ろくべえ まってろよ	灰 谷 健次郎	長 新 太	文 研 出 版
たなばた	君島 久子(再話)	初 山 滋	福 音 館 書 店
ちのはなし	堀 内 誠 一	堀 内 誠 一	”
ぼく、お月さまと はなしたよ	フランク・アッシュ 山口 文生(訳)	フランク・アッシュ	評 論 社
いいものもらった	森 山 京	村 上 勉	小 峰 書 店
あそびにきてください	なかえ よしを	上 野 紀 子	ポ プ ラ 社
やまなしもぎ	平野 直(再話)	太 田 大 八	福 音 館 書 店

季節にちなんだ絵本

村いちばんのさくらの木	来 栖 良 夫	斎 藤 博 之	岩 崎 書 店
うすずみのさくら	清 水 達 也	北 島 新 平	ほるぷ出版
たなばた	君島 久子(再話)	初 山 滋	福 音 館 書 店
つきがみていたはなし	も り ひさし	菊地 としはる	こ ぐ ま 社
つきのぼうや	イブ・スミグ・オルセン (やまのうちきよこ訳)	イブ・スミグ オルセン	福 音 館 書 店
こんやは おつきみ	谷 真 介	北 田 卓 史	金 の 星 社
14 ひきの おつきみ	岩 村 かずお	岩 村 かずお	童 心 社
ぐりとぐらの おきゃくさま	中 川 りえこ	大 村 ゆりこ	福 音 館 書 店
サンタクロースってほんとにいるの?	てるおかいつこ	杉 浦 はんも	福 音 館 書 店
おしょうがつさん	矢 崎 節 夫	尾 崎 真 吾	ポ プ ラ 社
おにたのぼうし	あまん きみこ	岩 崎 ちひろ	ポ プ ラ 社
おにのよめさん	き し な み	福 田 庄 助	偕 成 社
ひとりぼっちの かみさま	竹 崎 有 斐	伊 勢 英 子	金 の 星 社
ぼとん ぼとんは なんのおと	神 沢 利 子	平 山 英 三	福 音 館 書 店
おかあさんの 紙びな	長 崎 源之助	山 中 冬 見	岩 崎 書 店

科学絵本 はじめてであう科学絵本シリーズ・かがくのとも傑作集シリーズ(福音館)

フレーベルの科学えほんシリーズ(フレーベル館) 知識の絵本シリーズ(岩崎書店)

(内田 明德 今井 康弘 勝尾外美子 名倉 雅子)